

第2章

事前活動

事前活動とは.....	16
第2回日米ユースフォーラム	16
アメリカ大使館講演会	16
ビジネス講演会	17
クラウチ氏勉強会	18
春合宿	19
英語ディベートワークショップ	23
防衛大学校訪問	24

事前活動とは

第59回日米学生会議では、7月に始まる本会議に向けた準備として事前活動を行った。事前活動は、会議参加者が決定する前からの講演会に始まり、顔合わせの合宿、現在進行形の国際社会のトピックスについてのレクチャー、コミュニケーションスキルの講座など、本会議をより充実させ、円滑に進行するための諸活動を指す。本章では、これらの事前活動の様子を紹介する。

第2回日米ユースフォーラム

日時：2006年10月30日(月)

共催：JASCジャパン、社団法人 日米協会、日米教育委員会

後援：東芝国際交流財団

テーマ：“Reconciliation in a troubled world: Perspectives from Japanese and American Youth”

パネリスト：Hana Heineken (第55回日米学生会議米国側実行委員長)

川口耕一朗 (第59回日米学生会議日本側実行委員長)

唐沢由佳 (第58回日米学生会議日本側実行委員)

Lasantha Lucky Gunasekara (第57回日米学生会議米国側実行委員)

モデレーター：David H. Satterwhite (日米教育委員会事務局長)

日本外国特派員協会にて歴史認識をテーマに、120人以上の来場者を迎え、第2回日米ユースフォーラムが開催された。4人のパネリストは日本、アメリカという枠組みを超えた多様なバックグラウンドを下に、それぞれの経験や大学での専攻を活かし異なる観点から発言した。

東京裁判の正当性、広島原爆投下の是非、日中韓に現存する歴史認識の差異、日本における外国人差別の歴史についての発表が各パネリストからあり、その後の会場を交えての質疑応答の際にはパネリス

トと来場者との間の活発な意見交換が行われた。イスラエル・パレスチナ問題などを例に、「和解とはお互いの差異を許容することである」という指摘があり、その具体策は次代を担う若者が考えていく必要があるとの提言もなされた。

当日は高円宮妃殿下にもご臨席を賜り、英語スピーチをいただき、共催者団体の関係者の方々からお言葉をいただいた。

懇親会では、声楽家のメニッシュ純子さんによるJASCソングのコンサートがあり、学生と来賓の方々との懇談が行われた。

アメリカ大使館講演会

「日米関係の軌跡と日米学生会議の挑戦」

日時：2月14日(水)

主催：第59回日米学生会議実行委員会

後援：米国大使館

テーマ：「日米関係の軌跡と日米学生会議の挑戦」

パネリスト：阿川尚之 (慶應義塾大学総合政策学部長、元在米国日本大使館公使)

David H. Satterwhite (日米教育委員会事務局長)

乗竹亮治 (第55回日米学生会議日本側実行委員長)

Hana Heineken (第55回日米学生会議米国側実行委員長)

モデレーター：川口耕一朗 (第59回日米学生会議日本側実行委員長)

講演内容：米国大使館の後援の下、東京アメリカンセンターにて、第59回日米学生会議講演会を開催した。第1部では、「日米関係と軌跡」と題して、日米間の人的交流に携わってきた、阿川氏、Satterwhite氏から、それぞれ日本側、米国側から見た二国間交流の歴史、意義についてお話いただいた。第2部の「日米学生会議の挑戦」では、第55回日米学生会議日本側、米国側両実行委員長に、会議の意義や55回当時のお話をしていただき、その後の質疑応答では、来場者との活発な議論が行われた。

【実行委員後記】

本講演会は、第59回実行委員会が主催する初めての行事であったこともあり、試行錯誤を重ねてようやく実現した。応募に向けた、59回会議の説明会を目的としていたこともあり、日米両国の有識者、また会議OB・OGからそれぞれ、日米関係における会議の意義を伝えていければと考えていた。

阿川、Satterwhite両氏からは、日米関係150年における人物交流の歴史を踏まえた上で、現在のな会議の意義についてお話いただいた。その後、乗竹、Heineken第55回日米学生会議日本側、米国側両実行委員長からは、55回会議の企画、運営における困難、その過程において考えた会議の意義についての考察を伺った。

1934年の会議設立当初の緊迫した状況とは異なり、良好な日米関係の下で、72名の学生が1ヵ月交流を深める意義はあるのか。会議の根幹とも言える問いに、私自身答えを見出せずにいた。しかし、両委員長の考察は示唆に富み、経験に裏付けされたものであり、自問自答を繰り返していた私に光を与えてくれた。「人生の縮図と呼ぶべきJASC」—乗竹氏のそんな言葉から、JASCの組織としての成長の必要性を感じた。

(川口耕一郎)



意見を交わすパネリストたち

ビジネス講演会・国際コミュニケーション ワークショップ

【企画概要】

日時：2月19日(月)

主催：第59回日米学生会議実行委員会

協力：大和証券、NPO学習学協会

講演会：(株)大和証券グループ本社 CSR本社
金田晃一氏 「CSR時代の企業とNGOのパートナーシップ」

ワークショップ：NPO学習学協会代表理事 本間正人氏 「国際コミュニケーションワークショップ」

講演会内容：金田晃一氏講演会「CSR時代の企業とNGOのパートナーシップ」では、今発展を遂げているCSRの現状と可能性について、またアクター間のパートナーシップはどのように築けているかについて、金田氏の豊富なキャリア経験を通し、分かりやすく語っていただいた。

本間正人氏は、ビジネス・ラーニングとコーチングのパイオニア、NHK教育TV「実践ビジネス英会話」や企業研修講師など多分野で活躍中である。その本間氏による「国際コミュニケーションワークショップ」では、国際人に必要とされるコミュニケーション力を広げることを目指した。また、これに併せ、第59回会議の説明会、第58回会議のビデオ上映をそれぞれ行った。

【実行委員後記】

本日の前半の講師金田晃一先生は、第58回会議の報告会でも講評をいただいた方だ。流暢で分かりやすい講演によって今まで知らなかった企業の様々な努力に関心を持つようになった。特に、今回も強調なさっていた"Trust-Building PDCA Model"は我々実行委員も常に銘記しなければならない重要なものであろう。日米学生会議の簡単な説明会を挟み、後半はNPO学習学協会代表理事の本間正人先生に活発な参加型ワークショップを行っていただいた。まずは、二人組の性格あてっこゲーム。初対面の人とわずか10分もたたないうちに打ち解けられる。その後は4、5人の組に分かれ、国際コミュニケーションにとって大切なものはなにかについてBrain Stormingとグループごとの発表。本間先生のユーモアいっぱい、知恵いっぱいの楽しいコメントを挟みつつ、国際コミュニケーションの極意を参加者がと

第2章 事前活動

もに考える、濃密なワークショップだった。

(松田浩道)



金田氏による講演



本間先生によるワークショップ

クラウチ氏勉強会 ～米国の安全保障政策～

【企画概要】

日時：2月27日(火)

主催：米国大使館

テーマ：「米国の安全保障政策」

講師：J.D Crouch 国家安全保障問題担当大統領次席補佐官

講師履歴：南カリフォルニア大学博士課程終了後、米国の安全保障政策に従事。国防省次官補、ルーマニア大使などを歴任後、2005年に安全保障分野の

No.2にあたる、大統領次席補佐官に就任した。

勉強会内容：来日中のJ.D Crouch 米国国家安全保障問題担当大統領次席補佐官による勉強会が早稲田大学にて開催された。テーマは米国の安全保障政策から、日米関係、北朝鮮、イランの核問題、6者協議、イラク戦争など多分野に渡り、それぞれのテーマにつき、米国政府の公式見解、Crouch氏の個人的見解を伺うことができた。

【実行委員後記】

アメリカ大使館の協力のもと、来日したクラウチ米国大統領次席補佐官(国家安全保障問題担当)を迎えた勉強会が早稲田大学の教室を借りて行われた。日本の大学生と率直な意見交換を行ってみたいという次席補佐官の意向を反映し、参加者からは「将来的な核兵器の廃絶の可能性」や「今後のイラク情勢と米国の対応について」など、昨今の国際問題に対するかなり突っ込んだ意見が出された。会場には学生の他、日本の外務省職員の姿も見られ、通常ではあうことの出来ないアメリカ政府高官と直接対話できたことに参加者は一様に興奮した様子だった。(高井竜輔)



学生と対話するクラウチ氏

春合宿

5月3日～5月5日にかけて、代々木のオリンピックセンターにて第59回日米学生会議参加者が初めて一堂に会する春合宿が開催された。2泊3日という短い期間の中で、自己紹介とアイスブレイキング、大先輩による日米学生会議の歴史と理念に関する講演、講師の先生とエルマイラ大学の学生を招いた英語ディスカッションの練習、大勢のアルムナイを招いてのレセプション、分科会活動と全体討論会など、盛りだくさんの内容の合宿であった。以下、参加者の感想文を中心に活動を振り返る。

〇OB講演会



講演される岩崎洋一郎さんと中瀬正一さん

合宿が開始した初日に、大先輩に当たる岩崎洋一郎さん、中瀬正一さんを招いての講演会を行った。戦後間もなくの会議の経験をもとに、新しく日米学生会議の一員となったメンバーに対して激励の言葉を頂いた。

【参加者後記】

拍子抜けした。しかし同時に尊敬できることもあった。講演会後の私が感じた率直な感想である。日米学生会議には非常に長い歴史があることは有名である。そのため、お二方からどんな「刺激」を得られるか、なぜ日米学生会議を発展させることができたのか、彼らの情熱や考えにまで肉薄できると考え

ていた。

実際に講演として聞けたのは、そのほんの一部でしかなかったため、少々残念だった。「講演会」という場で、多くのことを知ろうとした私の考えも甘かった。

しかし、私はお二人を心から尊敬できる場面に遭遇した。それは、お二人が私を含めた多くの学生の質問に対して、丁寧にお答えしていたことだ。当たり前のように思えるかもしれないが、簡単なことではない。若い学生から質問・意見を真摯に受け答えできるような「謙虚さ」は誰もが持てるものではない。私はお二方のそんな何気ない「優しさ」こそ、この日米学生会議の真髄ではないかと感じた。

(間橋大地)

〇English Communication Program

英語によるディスカッションを円滑にすすめるため、SFCの榎栄ひかる先生を招いてのワークショップを行った。積極的に英語でコミュニケーションをするコツを教えていただき、大変盛り上がった。また、エルマイラ大学の学生を招いて班ごとに英語ディスカッションと立食パーティーも経験し、本会議の雰囲気味わうことができた。



英語ワークショップ的一幕

【参加者後記】

私は自分の英語に自信がなく、ワークショップ開始前は不安と緊張でいっぱいでした。しかし、ひとたび始めるとその不安は俄然やる気になりました

第2章 事前活動

た。人と人とのコミュニケーションにおいて、言葉それ自体が表す内容よりも、表情や姿勢によってより多くの情報が相手に伝えられる事実を理解し、これならすぐにでも自分にできると自信をもつことができたからです。言語はツールであるということを再認識しました。ワークショップでは様々なゲームを通して意思疎通を学ぶ機会が多く設けられましたが、そのとき何よりも心地よかったのが、参加者全員が熱く、真剣にゲームに取り組み、その効果を最大限に得られたことでした。

アメリカ側参加者との合流、JASCを通して出会う人々とのコミュニケーションがうまくいくように、ここで学んだことを普段から意識し、本会議につなげたいと思います。(本郷亜紀)



エルマイラ大学の学生と

○分科会活動

全員が揃ったところで、分科会も本格的に始動した。それぞれが本会議に向けた方針や活動内容を熱心に話し合い、合宿の最後には全ての分科会が順番に発表し議論した。最後の質疑応答は大人数ながらECの期待をはるかに上回る熱気を見せた。以下に参加者2人の感想文を掲載する。

Nationalism RTは最高だった。“いかつい”メンツが集まったせいか、議論では全員が積極的に発言し、「双方向」そのものだった。基本方針は初日の夕食までにスッキリまとまり、2日目からは議論も発表も全て英語に切り替えた。各自の論文も方向性

やRTでの位置づけが明確になり、安心して取り組む環境が整った。お陰でメンバー全員の満足する結果となった。思えばこれだけ効率的に熱く議論出来たことも珍しい。ファイナルフォーラムでは「観客を徐々にしっかりと引き込む」ことを至上命題とし、そのための具体的な秘策を次々と練った。中味は・・・お楽しみに！

(加納康宗)

いまだ経験したことの無いほど、アカデミックな議論を私の細胞全てが求めている。次々出る鋭い質問、トピックへの解釈や問題意識、意見をすり合わせて全体を纏め上げていく作業…どれをとっても分科会のメンバーが発言すればするほど、相乗効果で他の発言がより意味深いものとなるため、発言せずにはいられない。一心不乱に耳を傾け、そして考えを言葉にして紡ぐ。合宿会場へ向かう私の頭の中にあった、自分が議論へ果たして貢献できるか、という疑問は1日目に消え去り、3日目には密な議論がメンバーの心の絆まで強くしてくれていた事に気がついた。今は本会議でのさらに熱い議論を夢にみている。

(平井麻祐子)

○参加者感想（春合宿全体）

2007年5月3日から5日まで、国立オリンピック記念青少年総合センターにて春合宿が開催された。この日、私はようやく待ちに待った第59回参加者に会うことができた。

初日はまず、この有意義な会議をサポートしてくださっている主催者側からの講演やJASCのOBの方々から由緒あるこの会議の歴史的背景を知ることができた。私も含めた参加者にとっては、当初とは少し違ったJASCの側面に触れることができた。もちろん、それだけでなく初日から自己紹介を通じて少しずつ参加者同士、またECとの意思疎通が少しずつ見えてきていた。さらに一体感が見えてきたのが“English Communication Program”であった。ここでは講師を招いた英語でのコミュニケーション能力の向上のためのアクティビティーや東京に語学

留学に来ていた十数名のアメリカの大学生を交えた分科会の議論を進める機会は非常に充実していた。その後は、JASCのOBの方々と交えたレセプションや飲み会も企画されて、改めてJASCが偉大な先輩方の人生におけるかけがえのない冒険であったことが感じられた。

このように初日・二日目はJASCの概要を知りうえて非常に重要な企画が盛りだくさんであった。さて、個人的にこの春合宿で刺激的で、ハートに火をつけた瞬間を紹介したい。それは全分科会がこの春合宿で話し合った内容に関して参加者・実行委員・3名のOBの方の前で発表する場であった。アメリカの高校を卒業した私にとって、現在在籍している大学でよく思うことがあまりにも議論が少ない授業・講義が多いことであった。しかし、今回の各分科会の発表の後に末永く続いた議論はまるで日本にいるようでいない変な空間にいるようであった。近年、「日本人にはコミュニケーション能力がない」とか「NOといえない日本人」と日本人のコミュニケーション能力に対して問題視されているが、春合宿での最後の発表はそのような危機感を緩和してくれるような気がした。

そして、忘れてはならないのが春合宿を企画した実行委員である。春合宿まで行ってきた選考・春合宿準備・本会議準備、それはとてつもなくハードで忍耐力のいる「任務」である。今年のECの一つのテーマは「笑顔でいること」のようであった。だが、今までの準備からの疲れとストレスの蓄積が、ようやく春合宿で参加者と出会ったことで、それら負の連鎖がすべてゼロに戻った瞬間であったように見える。それによって出たECのとてつもない「笑顔」が第59回参加者にとっては非常に刺激なものとなったと考える。

参加者のユニークさ、ECの努力と凄まじい忍耐力、この双方がアメリカ側とうまくコラボレートできたら、第59回JASCは何かすごいものを後世に残すのではと期待している。その日まで、約2ヵ月半…
(伊関之雄)

○参加者による一言コメント

・議論は驚くほどの進展と熱気を見せ、また食事や夜更かしではみんなの多様性を楽しめた。どうしてここまで一気に馴染めるのか。JASC万歳！GW明けたらhomesick start!!
(加納康宗)

・「合宿」という日常から切り離された「バーチャル」の中で、普段は言わないことが言え、しないことができました。そして良い出会いがありました！

(望月進司)

・人生でこんなにも濃密な3日間は、存在しなかった。たくさんの刺激を受けると同時に、このメンバーなら歴史に残る会議をつくれると直感した。
(間橋大地)

・59回JASCは72人で作り上げるのではなくOB・OG協力して下さってる方々皆の夢。ありのままの私で萎縮せず、足りない知識は補ってもっと皆と話していこう！前向きになれた。
(間嶋絵梨)

・JASCの先輩方の歴史を背負い、36+36で自分たちの会議を作っていく為のビジョンと気力を養えた3日間。夏が今はひたすら待ち遠しい。

(平井麻祐子)

・各々が自身を高めようとする意識を持って臨んでおり、励まされた。また自分自身において今何が必要であるかというランク付けができ、大変有意義な合宿となった。

(古屋佑樹)

・とても密度の濃い3日間だった。それはひとえにECの優れた統率力と、メンバー一人ひとりの意識の高さによるものだと思う。本会議に対する期待とやる気が上がりました！

(上田 来)

・「Energyが溢れている。」私の春合宿の印象だ。きっとこれがJASCモードに入るとのことなだろう。私も乗り遅れないようにしなければ。

(角田亜紗子)

・ただ事じゃない！ただものじゃない！(笑) この集団の目のキラキラとエネルギーは半端ないです！でも心から嬉しい!!一杯勉強して本会議に臨みます！

(山本詩乃)

・春合宿最終日、マジ眠かった…。本会議は長いし、もっと寝不足になるかと思うと不安だ…。でもJASCの可能性を感じることができたのは良かった。

(武田尚樹)

第2章 事前活動

・ECとして、多くの不安を抱えて迎えた合宿でしたが、参加者の予想以上のやる気と情熱にもうびっくり！きっと素敵な会議になると確信できました。

(松田浩道)

・春合宿、初めは緊張していたけど、一緒に時間を過ごすと共に打ち解けることができました。このメンバーなら本会議も絶対大丈夫!!

(土岐吉史)

・春合宿で素晴らしい人たちに会い、信じられないくらいのエネルギーをいただきました。世の中にはこんなに凄い人がいるのか、人はこんなにも色々なことができるのか、こういう発想もあるのか、と驚きの連続でした。これからこの素晴らしい仲間と一緒に過ごしていけることが楽しみです。これからぶつかり合うこともあるでしょうが、そうやってお互いをピカピカに磨き上げていけたらな、と思います。

(吉川真由)

・僕と彼女とJASC。君に会ったこの瞬間、時間は動き出した。

(上野良輔)

・このメンバーで一生、時には熱くアカデミックな議論をし、また時にはバカ騒ぎをし、とにかくずっとこの場所に居たい、そう思わせてくれる空間でした。

(廣田隆介)

・JASCで本当に素敵なメンバーひとりひとりに出会えた事を感謝しています。春合宿を終えてモチベーションも高まり、“Life Changing Experience”にする為にも頑張ろうと思います。

(竹内菜緒)

・今は春合宿がJASCエピソードのほとんど。あっという間の3日間が、夏に向かうパワーになる。可能性を引き出す熱気の結集に感謝します。

(堀 沙織)

・この春合宿は本当に濃い3日間だった！とにかく色々なイベントが盛りだくさんで、自分がJASCerの一員であることの喜びを実感できた！

(金 大鐘)

・春合宿では仲間のレベルの高さを知り、良い刺激を受けました！また、こんな短期間にここまで親しくなれたことに本当に驚かせられました！

(櫻 静香)

・素敵な出会いと刺激的なプログラム。歴代Alumniの方々。不安、焦り、でもわくわく。そんな複雑な感情と共に過ごした濃い春合宿だった。

Cheers Jasc59!

(渡辺恭子)

・たった3日間という短い時間でしたが、参加者同士が見知らぬ人から「仲間」へのステップが確実に踏めた大変有意義な時間でした！

(本郷亜紀)

・やっと理解して言えるようになった「Life changing experience」という言葉がこれからは口癖になりそうな予感がした3日間でした。

(呉 宣咏)

・春合宿を通して、自分の現状をみつめることができた。そこで得られた課題をしっかりと把握し、夏につなげたい。

(高野恭平)

・ぎゅうぎゅう詰めスケジュールに、ぎゅうぎゅう詰め会議室。そんな物理的状态と共に、各人の心の距離も近くなったみたい。

(李 凌毅)

・春合宿は、これから、59回会議がはじまるのだという自分の実感も持ったのと同時に、そこは、日本側参加者36人の期待と熱気でうまった空間だった。

(安田雅治)

・初めて59回の全員に会うことができわくわくしました。分科会発表での質疑応答で鋭い意見がいくつも飛び交っていた光景が印象的です。

(篠原由香里)

・興味や関心分野の違う人達と討論する中で、新しい発見がたくさんありました。個性的なみんなと一緒に、一つの“JASC”を作り上げていくのが楽しみです。

(佐藤逸美)



レセプションに訪れたアルムナイとともに

英語ディベートワークショップ

日時：6月3日(日)

場所：ココデシカ

講師：井上敏之氏



ディベートに盛り上がる参加者たち

英語での議論に備え、論理立てて話す訓練の一環として日米学生会議OBの井上敏之氏による英語ディベートワークショップ開催された。参加者は、英語の口慣らし、短いスピーチ練習の後、作戦タイム(15分)⇒賛成派立論(2分)⇒反対派立論(2分)⇒反対派反論(2分)⇒賛成派反論(2分)⇒賛成派まとめ(2分)⇒反対派まとめ(2分)の流れで、3人1組でディベートを行った。本会議に備え、英語で話すための大変よい訓練となった。

【参加者後記】

JASCのOBでもある講師の井上敏之氏の英語ディベートワークショップは衝撃の幕開けだった。ホテルのフロントにあるようなベルが1回鳴ったと思ったら、井上氏を含め参加者は全員頭を英語に切り替えて講義が始まった。まず一対一でPREP(結論・理由・裏付け・結論)の方式で4分のスピーチをした。これを20人以上が1つの部屋でやるのだから、英語の嵐になったことは想像できるだろう。

本題のディベートとしては、3人グループを8つ作りそれぞれ対戦する形がとられた。「マックが世界にもっと広まるべきだ」や「日本は核兵器を所有

すべきだ」という様々な命題に対して賛成派・反対派に別れ、活気ある論議が行われた。ここではコンテンツの重要性と人を惹きつけるプレゼンテーション能力の大切さを身をもって知った。いくら心を込めても中身のないスピーチだと聞いてもらえないし、良い主張でも観客に伝えられなければ意味を成さないのだ。本会議までの間にこれらの技を習得できればと願う。
(角田亜紗子)

(井上敏之氏のウェブサイトは、

<http://www.speech-debate.com>)

防衛大学校訪問

日時：6月22日（金）

防衛大学校訪問は、毎年行われている日米学生会議の正式な事前活動である。日米学生会議参加者にとって、普段なかなか接することのない防衛大学校生との交流は安全保障問題を考える上で非常に大きな刺激となる。

本年度の研修は、防衛学国防論教育室太田一等陸佐によるイラク人道復興支援に関する講義によって始まった。そして、防大生との学生食堂での会食、防大生の課業行進見学の後、国際関係学科岩田教授による核に関する講義を受けた。

その後、防衛大生と日米学生会議参加者による分科会ごとのディスカッションを行った。安全保障、憲法9条等様々なテーマについて活発に意見交換がなされ、終了後の懇親会会場でも白熱した議論が続いていた。

【参加者後記】

防衛大学校は、大学の施設や規模等を除けば、起床整列や巡検等の寮生活、敬礼や行進等の基本動作、上級生と下級生の関係、学生の話し方や物腰など、海上保安大学校と共通する部分が多く見受けられた。



防衛大学校生を交えた分科会の様子



歓迎レセプションで

今回の訪問の中で最も印象に残っている事は、分科会ごとに防大生を交えて行われたディスカッションである。私たちのグループは「日本の国防」というテーマで議論を行ったが、そこで「大学校生」と「一般大生」との「違い」が如実に現れていたことが興味深かった。大別すると、制服を着ている私や防大生側は、有事法制や集団的自衛権に対して前向きな立場をとっていたのに対し、一般大生側は正反対の立場をとっていた。この「違い」はどこから生まれるのか考えるべき点であるが、仮にそれが自衛隊や海上保安庁への理解不足や知識の欠如から生じているのであれば、対策を講ずる必要がある。なぜなら、我々の任務は国民の信頼と協力があって初めて遂行が可能となるからである。平和や安全に対する脅威が専門化・多様化・国際化している今日、日本の平和と安全を守るためには、消防、警察、海上保安庁、自衛隊等の活動だけでなく、国民一人ひとりの「高い意識」が極めて重要なのである。

この防大訪問を通して、テロ対策や不審船対策、大量破壊兵器拡散防止訓練といった広範な分野において、海上保安庁とより緊密な連携が求められる自衛隊の将来を担う防大生と交流できたことは、価値ある貴重な経験となった。（上野良輔）